『現代民俗学研究』第5号（2013年3月）
Journal of Living Folklore 5（Mar. 2013）

運動と開発

—1970年代・南佐渡における民俗博物館建設と宮本常一の社会的実践—

Local Development as a Cultural Movement

Social Practice by Miyamoto Tsuneichi and the Construction of a Folk Museum in Southern Sado Island in the 1970s

門田岳久* 杉本　浄**

KADOTA Takehisa SUGIMOTO Kiyoshi

はじめに

筆者らは2009年から新潟県佐渡島をフィールドに、廃校舎の再活用を契機とした地域活性化の運動について実践的かつ学術的に関わっている。住民が主体となって行われるこの種の活動は「街づくり」と呼ばれているが、一般にそこで期待されていることは、行政的手法によって施設やイベントを拡充し、交流人口・定住人口の増加を目指す政策面での効果だけではない。一般の住民が参加、実践すること自体がもたらす楽しさや生きがいといった内面的効果もまた期待されているのである。こうした「魂の活性化」とでもいうべき期待効果は、街づくりを従来のように政治の領域で語るのではなく、個々人の生活に位置付けて理解する必要性を示している。あるいは逆に、このように言えるかもしれない。近年は政治が行政や政府の独占を離れ、人々の日常生活の領域においても展開するようになっている、と。

政策の生まれるプロセスに行政のみならず住民が関わり、その意思や実践を取り込んでいこうとする政治手法はローカルガバナンスと表現されている。ガバナンスとは統治や管理の意味だが、集団が自ら意思を持って自己を管理するというニュアンスを有しており、その点で、従来型の上意下達方式の統治方法（これをガバメントという）と比べて現場の意思決定（合意形成）や自治に強いニュアンスが込められている。いわゆる「新しい公共」の理念に沿うように、政策策

* 立教大学観光学部

** 東海大学文学部

Copyright © 2013 by The Society of Living Folklore

定手法の「ガバメントからガバナンスへ」という変化は2000年代以降の政治状況を巡るキーワードの一つになっており、とりわけ地方行政の場ではローカルガバナンスに対して期待がかけられている［山本編 2008; 永田 2011］。

佐渡では少子化や自治体合併に伴う公立学校の統廃合によって廃校舎が増加しており、再活用を巡る住民参加型開発が頻出している。これは校舎というハードをめぐる活動というよりも、その使用法や資源模索をめぐるソフト面での開発である。市有財産である廃校舎を再利用したり博物館運営に転用したりという取り組みそれ自体は、確かに行政が執り行うべき事案かもしれない。しかし実際の現場で行動を期待されているのは周辺の住民であり、行政とつかず離れずの距離を保ちながら再利用の取り組みが進みつつある。

実は佐渡でこうした活動は、住民参加型開発やローカルガバナンスなどの用語が流通するはるか以前の1970年代から見られており、地元住民の参加、行政のサポート、そして本土の文化人や知識人の関わりという、現代的な地域開発を先取りするかたちで展開されてきた。廃校の再利用や文化の観光資源化といった現在の事例に歴史的深度を読み取れること自体興味深いが、それ以上に民俗学との関わりで注目すべきは、そこに外部から携わった宮本常一の存在である。

周知の通り宮本は学問を通した社会的実践に民俗学者の枠を超えて関わったことで知られている。そのスタンスや開発面での成否については多々異論もある一方、宮本の活動の詳細が明らかにされることはまれである。とりわけ全国離島振興協議会や観光文化研究所といった機関以外の、地域社会をベースとした活動については一部［e.g. 山古志村写真集制作委員会編 2007］を除いて記録が僅少であるため、実践家としての認知度の割には不明な部分が多い。そこで本論では南佐渡における住民主体の街づくりや自文化表象の中で、宮本常一と地元の住民の活動の具体像を証言や記録から明らかにしつつ、その活動を、文化をめぐるネットワーク状の動きとして捉えたい。その記述を通じ、現在の住民参加型開発が一朝一夕で形成された現象ではなくかつての活動の延長上に位置付けうることを示し、現代民俗学的な開発論に寄与したいと考えている。

1．新たな〈政治〉と民俗学

民俗学的実践に代表される、学問的成果を活かした実践的活動とは一種の「政治」的な活動であるといえる。もちろんここでいう政治とは政党政治や行政運営にかかわる狭義の現実政治を述べているのではなく、前述のとおり人々の生活領域で展開するものを指している。ローカルガバナンスが生起した主な背景には、統治権力を独占してきた政府や行政側の抱える問題があるとされている。具体的には緊縮財政によって従来通り行政の支出だけでは施策の遂行が不可能になったり、策定された政策が必ずしも市民のニーズと合致せず、しばしば政治不信を招くケースが増加したりといった事情がある。前者はいわゆる新自由主義改革に伴う財政の縮減と、それをカバーするための民間活力の利用であり、財政の空いた穴を現場の住民レベルで埋めるという現在世界的に拡大する地方自治の動向の一環である。他方後者は行政と市民との対等な立場性に基づく協働的な問題解決の場面が、地域に関わる公共政策において拡大していることを示している［武川 2010］。言い換えると住民の関わりを欠いては全うできない政策が増加していることを意味しており、地域開発、地域医療や地域福祉など「地域」政策の増加はその証左である。

近年の地域開発の特色は、かつてのように政府・行政・大企業主体の大規模建設型の開発では

なく、地域社会に潜在する「文化」や「自然」を開発資源とするような、ソフトな開発とでも言える手法である。この場合の文化とは祭りや民俗芸能、特産品や名産物、歴史的に形成された町並みや文化遺産等で、必ずしも物質的な形があるわけではなく、また必ずしも新たに建設する必要のない、住民にとっては当たり前の存在である。生活に埋め込まれた文化や自然を資源化する手法は、それらを所有・管理してきた地域住民の意向や在地の論理に開発が大きく左右されるため、ローカルガバナンスでは政策の策定過程が住民に開放され、住民は一種の主体となることが求められている。もちろんここに住民と共同で作り上げた政策、というニュアンスを打ち出したい行政の思惑を読み取ることが必要だし、またローカルガバナンスの研究がしばしば成功例を論（あげつら）うことには注意を要する。住民参加や合意形成という語彙の聞こえの良さが、この種の政治過程に対する価値前提的な議論を導いていることも否めない。

とはいえ財政縮減という抗いがたい現実を前にすると、地域に埋め込まれた資源を活用する地域開発が拡大していく流れ自体は続いていくものと思われる。それは同時に、民俗学における政治への関わり方にも再考を迫っている。ローカルガバナンスはいわば住民の生活をベースに展開する現象であり、これまで生活の場とは一見無縁な世界で執行されてきたと思われていた政治が、それと密接に融合し始めていることでもある。よって庶民の日常を対象とする民俗学が捨象しうる現象でないことは言うまでもない。だが長年民俗学ではこうした意味での政治が主題となることは皆無であった。例えば日本民俗学会のジャーナル『日本民俗学』では3年に1度研究動向を特集しているが、そこで政治やガバナンスが取り上げられることは一部例外［室井 2010a］を除いて皆無であり、各種の講座本でも同様である。

むろん「政治」を単に資源の配分と秩序の維持を巡る意思決定の力学であると捉えるならば、この意味での政治をミクロな局面で捉える研究は民俗学でも行われてきた。例えば水利慣行や宮座、祭祀組織や寄合といった研究を、村落社会における資源配分や意思決定の研究であると位置づけることも不可能ではない。だがこれらは村落という閉じた空間の秩序を再生産するマイクロポリティクスであり、村落外部で超域的に展開する現実政治とは切り離された仕組みとして描かれざるをえない。他方ローカルガバナンスは一面において村落社会の内部的な動向として理解できる側面もあるが、行政や政府レベルの動向と互いに連動している現象であり、フィールドのミクロな局面とその外部という両世界を切り分けることなく議論すべき主題である。その意味では、既存の民俗学的村落研究が必ずしも重視してこなかった視点を要する。

問題は民俗学が広義の政治との関わりを調査方法論あるいは理論の上では自覚的に打ち出してこなかったにも関わらず、学史を紐解けば密接な関わりがあったという事実である。それは例えば柳田国男や初期民俗学の思想史的側面を分析した室井康成や大塚英志が述べるように、民俗学には政策科学としての側面が織り込まれていたということのみならず［大塚 2007; 室井 2010b］、文化財制度と民俗学者の関わりについての分析［菊池 2001; 岩本編 2013］が示すように、民俗学的営為が当の研究者の意図を時に超えるかたちで文化政策の策定に動員されてきた。さらに民俗学的実践や公共民俗学に関する近年の議論［重信 2010; 菅 2012］は、政治とは縁遠いところに自らを位置付けてきた自己認識とは裏腹に、民俗学には学史のうえでも現在においても政治への志向性が内在していることを示している。

たとえ民俗学の枠組みに政治という主題が組み込まれておらず、「正統」な研究主題ではないとみなされているとしても、現実に民俗学は意識的かどうかに関わらず政治への学術的・実践的関与を行ってきた。これを「無作為の政治性」と仮称しておこう。であれば政治を民俗学的主題

から敢えて除いてノンポリを装うことは政治性の意図的な隠蔽にほかならない。ローカルガバナンスが生活レベルで展開される政治である以上、民俗学的フィールドを脱政治化され漂白された世界として描くこと自体、疑似的なユートピアの仮構に帰結することであり、まずは民俗学の営為自体を再帰的に捉え返していく必要がある。

2．宮本民俗学における実践と佐渡

（1）民俗から生活へ

そうした点を検証する素材として宮本の民俗学的実践はふさわしいかもしれない。なぜなら彼の実践は、「社会に開かれた学問」を目指すといった近年の洗練された言葉で取りまとめられるような、学問の現在的課題と未来像を見据えた戦略的な行為であるというよりも、目の前に拡がる島や村の疲弊をどうするか、あるいは食うに困った人々や地域運営に奔走する人々に助けを求められたときにどう対応するか、などという現場から立ち上がったモチベーションに支えられた行為だと思われるからである。多分に済民的であり、かつ眼前の課題に拘泥する泥臭さは、ある時は民衆的世界観を称揚する左翼文化人から絶賛され［谷川 1971］、またある時には大衆を盲目的に崇拝する翼賛的保守主義者と批判されたり［藤田 1960］、古い民俗や共同体を賛美しているとして批判されたりと［岩本 2012］、一定しない評価に宮本を導いてきた。左右いずれの思想的立場にも回収されうる振幅の激しい活動は、突き詰めていえば自らの研究や実践がパフォーマティブに帰結する政治的効果について、宮本自身が無頓着であったことに起因すると言える。その姿は同時に、左右両陣の文化人を誘引してきた初期民俗学の思想的両義性と重なり合って見える［鶴見 1998］。従ってフィールドをベースとした宮本の活動が、いかにして地域開発という実践に引き寄せられていったのかを実証的に明らかにすることは、ひいては民俗学における「無作為の政治性」を明らかにすることにも敷衍しうると考えられる。

ここで宮本常一（1907 ～ 1981）という人物について改めて紹介する必要はないだろう。「旅する民俗学者」として定型化されたイメージを持つ宮本であるが、彼が全国の村々をもっともよく歩き、民家に宿泊しながら民俗調査を主眼とした聞き書きを行っていたのは戦前から戦中にかけてである。宮本の年譜や活動歴を見ると、そうした旅のスタイルに大きな変化が見られるのは戦後、民俗調査に代わって農村での農業指導や地域リーダー育成を目的とした旅が増えたころである。その背景には戦禍が激しくなってきたことと、宮本の属したアチックミューゼアム（1942年に日本常民文化研究所と改称）の主宰であり、物心両面で宮本の庇護者であった渋沢敬三が、戦後公職追放によって社会的地位を失い、研究上の財政支援が得られなくなったこと、そして終戦後の荒廃の中で民俗調査に代わる彼の優先課題が出てきたことである。

宮本は1944年、渋沢のもとから大阪に帰り中学校の嘱託教諭をしたのち、翌1945年に大阪府嘱託として生鮮野菜需給対策に従事する。同年北海道への入植者に同行する仕事を終えて府を退職したのち、農業指導や食糧増産のために全国を行脚したとされている。このあたりの行脚は、篤農協会から名前を変えた新自治協会の嘱託職員として、戦前から培われた人脈や地方の篤農家を頼った旅に加え［さなだ 2002］、閑職にあった渋沢の調査旅行への同行としても実施されている。1952年には全国離島振興協議会が設立され、無給の事務局長として4年間務めているほか、1954年には林業金融調査会において理事を務め、山村社会経済調査に従事している。要す

るに戦後すぐの宮本は、いわば民俗学者としてではなくもっぱら農山村の産業振興・地域振興に携わる調査員・指導員として活動しており、執筆された文章もまた戦前の民間伝承や村落史を中心としたものから、例えば離島の現実的問題を析出した『しま』連載の文章のように、「唱導色（advocacy）の強い著作」［川森 2012: 213］になっていく。

その宮本が地域振興へのコミットメントを心中に携えながらも、再びアカデミックな調査へと回帰していく大きな契機になったのが、1952年から3年に亘って行われた九（八）学会連合対馬調査への民族学班調査員としての参加である。ここで宮本は漁業制度に関する調査報告のみならず、のちに『忘れられた日本人』にも収録され宮本の代表作ともされるようになる寄合についてのエッセー「対馬にて」を執筆している。坂野徹が言うように宮本や九学会連合対馬調査が、対馬の領土的帰属をめぐって議論されていた当時の風潮に学術的な「お墨付き」を与える機能を有していたことは確かであるにせよ［坂野 2012］、宮本がこれ以降、九学会連合調査や公職復帰した渋沢および常民研という研究基盤を通じ、再び学術に身を置いていったことは確かである。

ただし宮本から実践家としての側面が消え去ったわけではなく、逆に学術活動と並行する形で、1950年代から様々な地域活動への参与も目立ってくる。この当時彼はしきりと、従来のような日常生活から「民俗」を切り取って採集する調査手法への疑問を呈し、農民や漁民の生活全般を捉える必要性を訴えるようになる［宮本 1993: 154］。のちに民俗学批判から生活学・民具学への「転向」へとつながっていくような、「民俗から生活へ」という彼の学術的変化の過程は、むしろ宮本の学問が済民や地域振興という実践的課題と融合しつつあり、その両者を明確に区分すること自体が困難になりつつあったことを示している。そして学問と実践が絡み合う形で展開される実験場ともいうべき場所になったのが、ほかならぬ佐渡島だった。

（2）南佐渡とのかかわり

宮本が初めて佐渡を訪れたのは1958年10月13日のことである。新潟大学で11日より開催された日本民族学会・日本人類学会連合大会後のエクスカーションに加わり、金山のある相川や景勝地の尖閣湾を見物し、翌日の午前中は真野御陵、国分寺、妙宣寺を回った［宮本 2009（1970）: 251］。この時の宮本は佐渡観光の典型的なコースを辿ったことになるが、翌年にはじまる九学会連合による佐渡（予備）調査の下見を兼ねていたようである［宮本 1964b: 561］。

最初の来島の際、後に宮本とともに民俗学的実践を展開していくことになる地元の民俗学者・本間雅彦（1917～2010）が両津埠頭に出迎えた。本間は佐渡農業高校での教師の傍ら島

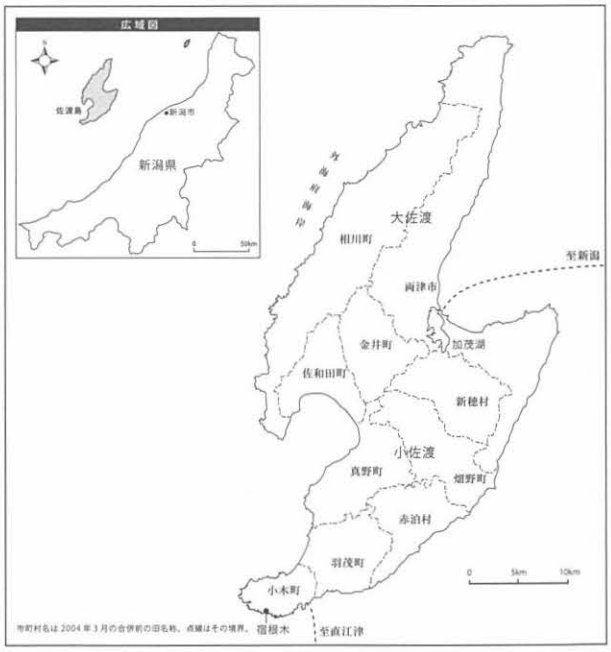

図1　佐渡全図および旧町村名

の民俗研究を手がけ、生活綴り方運動など島の文化運動にも明るかった。埠頭での出会いまで、本間は3つの経路で宮本を知っていたという。1つはかつて助手をしていた東京農業大学の同窓で農業経済を専門とする高松圭吉、2つは師事をしていた柳田国男、3つはおんでこ座（後述）を佐渡で旗揚げすることになる田耕（でんたがやす）こと田尻耕三（1932～2001）である［本間 2004（1981）: 194］。翌年、宮本は本間にも九学会連合佐渡調査の予備調査へ加わるよう手紙で依頼し、佐渡の受け入れ窓口として頼ることになった［池田 2010: 16-17］。

九学会連合佐渡調査は1959年の予備調査を経て、文部省科学研究費の助成を得た1960年と1961年に本調査を行った。3年間の調査で宮本は対馬同様民族学班に属した。彼の調査行程は1回目が1959年8月4日～15日（11泊12日）で、前半の8日までを島の北側の外海府を回り、10日からは南佐渡のある小佐渡を訪れた。2回目は1960年8月14日～28日（14泊15日）の間に来島し、3分の2を小佐渡、残りを大佐渡の調査にあてた［毎日新聞社編 2005a: 163, 230-231］。いずれも本間雅彦宅のある畑野を拠点として回っている。池田哲夫の近年の研究［池田 2010］で明らかにされているように、本間の知己を頼りにすることも多く、本間自身を引き連れて歩いた場所も多かった。1961年の最終年に宮本は来島していないが、彼の調査は本間との共同調査を元にした「佐渡の原始生産構造」［宮本 1961］や「佐渡北岸における農業生産の発展と労力」［宮本 1962］、および「労働慣行」［宮本 1964a］として明らかにされた。

九学会連合調査を通して佐渡での人脈を増やした宮本に寄せられた期待は、離島振興法の事務局長として彼が培ってきた経験であり、かつ中央官庁の人脈や渋沢敬三の繋がりだったが、何より後進地域からいかに開発を進め、生活を向上させていけるのかを具体的に明示してくれることだった。以下に述べるように特に宮本の話に関心を示したのは、羽茂（はもち）平野を除けば傾斜地や台地や山地の多い南佐渡の人々である。「佐渡の中でも最も貧困で食うや食わずと言われた南部の畑作地帯の農家」［信田 2004（1981）: 207］では、生活の向上のためには何らかの工夫が必要であり、彼らにとって宮本の示すヴィジョンはことさら魅力的に映ったのだと思われる。

では宮本が南佐渡に深く関わっていく過程はどのようなものであったのだろうか。小木町宿根木（しゅくねぎ）にある称光寺住職、林道明（はやしどうめい）（1913～1989）は第1回目の調査で宮本が集落に立ち寄った際に、突然の訪問を受けている。2人は寺の玄関で宿根木の生活などについて雑談を交わしたが、宮本は「宿根木の村は岬の村々と違って歴史や伝統が深く、特に和船や船乗りの生活について調べてみたい」というようなことを林に伝えた［林 1982: 114］。岬とは三崎とも表記される小木半島の尖端地域のことである。この時、宮本はこの岬の各集落を訪ね歩いたが、その道の悪さを「それこそ神武以来の道がそのままになっている」と表現している［宮本 1969a（1959）: 102］

林はこの出会いから約2年後に渋沢敬三が『文藝春秋』に寄せた「わが食客は日本一――努力の民俗学者宮本常一」を目にし、大きな感銘を受けた。当時彼は公民館活動に関わっていたこともあり、翌1962年11月末に南部地区公民館主催の社会教育研究会の講師として宮本を招聘するに至った［林 1982: 113］。この場合の「南部」とは当時の羽茂町、赤泊村、小木町を含む行政の管轄区域を示し、ごみ焼却などの合同公共事業や改良計画において繋がりを有していた。この時宮本は南部3町村を講演して回っただけでなく、請われて本間の住む畑野町や金井町でも話をした。この時の話は宮本の「佐渡所感」に詳しいが、地場産でない本土から取り寄せた産物を販売する観光業を痛烈に批判する一方、南佐渡に芽生えつつある新しい動きに注目し、一条の光を見いだしている。羽茂町での2回目の講演会で、八珍柿の普及に努めていた元農業改良普及所所長の杉田清や現職の信田敬に出会い、後の深い交流へと発展する布石になった。また同じ会場に集

まった「若者たちの眼に異様なまでに物を見つめるまなざしに」にも着目している［宮本 1970（1962）］。

これを期に、南佐渡3町村は地域開発の基盤作りのための助言と生活向上のための啓発活動のために、宮本を頻繁に招聘することになった。分かっている限りでは1963年12月2日～8日（6泊7日）、1964年3月2日～5日（3泊4日）、新潟地震直後の同年6月18日～26日（8泊9日）、1965年3月22日～26日（4泊5日）、同年8月1日～4日（3泊4日）、1966年3月8日～11日（3泊4日）、同年8月31日～9月3日（3泊4日）である［毎日新聞社編 2005a; 2005b］。宮本はこの3年弱の間に実に7回招かれ、多い時で1年に3回も訪れて講演や調査を行った。本人の言では「このうち四回は新生活運動協会から依嘱をうけた村づくり運動の指導であり、あとの3回は赤泊村からの調査の依頼、小木町の産業診断、佐渡の青年諸君の招待によるものだった」という［宮本 2009（1970）: 254］。

赤泊村では村長の要請で『経済実態調査報告』を仲間らと作成した。宮本の他、林業金融調査会の田村善次郎と藤田清彦、全国離島振興協議会の大見重雄らが1964年6月に調査を行い、同年8月に宮本は経済企画庁離島振興課の加茂事務官を連れて村内各所を訪れ、村の青年と語らっている［赤泊村 1964］。このような場においてなされた宮本らの提言は、山地を切り開いて畜産、果樹などの成長部門の育成を図る開拓パイロット事業として実施されることになった［赤泊村史編纂委員会 1989: 694-702］。

1965年には隣の羽茂町で町総合開発審議会委員に就任し、「人づくり、道づくり、主産地づくり」を自身のスローガンに掲げつつ町の開発指導を行った［『朝日新聞』2007年4月30日］。既にこの地では八珍柿（「おけさ柿」）を特産品とすべく、1964年より町立柿栽培改善実験地が一部県単独補助事業の下で運営されており、柿を主軸に据えた街づくりが住民 - 行政間の連携で進められていた。宮本は柿の普及を主導してきた先述の杉田清と意気投合し、農家への普及活動に助力した［おけさ柿物語編集委員会 1985: 389-390; 宮本 2009（1970）: 174-179］。宮本は各集会所で話をする際に集まった人たちを一喝することもあったほど、地元農家と密接な関係性を築いていたようではあるが［信田 2004（1981）: 206-207］、ここで宮本が行ったことは直接的な農業指導と言うよりも、柿のブランド化に向かう一種の啓発活動であった。柿栽培を単なる農業生産としてではなく街づくり＝地域開発として行うには、住民意識の開発が必要だという考えが町の方にもあり、新生活運動協会の推薦を受けて宮本を招聘したのである。

小木町では助役の金子繁が1964年8月21日に突然の宮本の訪問を受け、岬地区の深浦まで同行することになった。この時宮本は小木岬の生活道路の改良を急ぐことと漁業施設の整備を言い伝えるだけで、直接小木町に助言する機会を持たなかったが、金子が1969年に町長になってから後には、産業診断、生活振興、小木半島の一周道路など町政の指針に関して、宮本最後の来島（1980年）に至るまでしばしば助言を求めた。特に小木町は国の離島対策に絡む補助金を数多く得ていくのだが、宮本の中央での人脈が生きたことが明記されている［金子 1990: 129-133］。その他南部以外で、宮本は請われて真野町の農業指導なども行っている。

ところでこの頃、宮本の周りには若者や学生が多数集うようになっていた。1965年4月に武蔵野美術大学の専任教授になり、また1966年1月には近畿日本ツーリストの出資で観光文化研究所が設立され、その所長に就任したことが大きな要因であった。若い所員たちを南佐渡に送ったり、八珍柿やノリ漁の映像を紹介するために日経映画社に撮影に行かせたり、武蔵野美術大学で小木町白木や宿根木といった集落を調査していたグループの展示会を世話したりした。他方、

旧知の田耕が佐渡に来島し、新しい芸能集団であるおんでこ座を立ち上げ、佐渡の民俗芸能である鬼太鼓と文弥人形の技術を若者たちに継承させる構想を示していたのもこの頃であり、宮本は田のために資金集めに協力した［宮本 2009（1970）: 254-255］。このように当初九学会連合の学術調査として入島した宮本であるが、次第に彼を取り囲む島内外の若者や有志とともに、街づくりや地域開発といった動きへと活動を拡大させていくことになる。

3．小木民俗博物館構想

（1）市民参加による民具収集

九学会連合佐渡調査から 1966 年 8 月までの佐渡行きの経験は、1970 年に出版された『私の日本地図　佐渡』にまとめられている［宮本 2009（1970）］。しかし 1966 年の訪問以後 4 年間は、結核の療養と多忙のため、佐渡を訪れることはなかった。他方、宮本空白期間に佐渡では様々な動きが起こっていた。本論の趣旨から特に注目すべきは小木町宿根木における民俗博物館設立に関わる住民活動である。

1970 年に入り、宿根木では先述の林道明や小木町役場の職員である中堀均らが中心になって民具を収集しはじめた。そのきっかけは同年 3 月末に宿根木小学校が閉校し、街場である小木小学校に統合されることで、廃校舎の利用をどうするのかが地元で議論されたことにあった。宿根木ではメリヤス工場になるといった噂が流れたが、母校を工場にするよりは何かしら文化施設へ転用する方がよいのではないかとする意見が出てきた。こうして徐々に博物館へ転用する方向へと議論が向っていったようである［鼓童 1989: 8］。

高度経済成長期絶頂の当時、古いモノが大量に捨てられており、南佐渡も例外ではなかった。その一方で、大阪で万国博覧会が開催され、これを前後して骨董ブームが起こり、貴重な民具が散逸する状況にあった。佐渡でも自治体の社会教育課職員が民具の散逸を防ぐために、住民に訴える事態になっていた［『新潟日報』1971 年 4 月 7 日］。こうした状況下において当時公民館長で老人クラブに関わっていた林は、クラブの協力を得て民具を集めはじめた。その後、保存場所が手狭になったため、町長の金子繁に宿根木小学校の廃校舎を使用できるよう申し込んだが、その際に表に立ったのも老人たちだった。金子の回想によれば、「宿根木部落の老人クラブの数人が町長室へ現われた。用件は老人クラブでは趣味で、各家庭で不要になった民具を集めているが、既に置く所がない。部落の個人の土蔵を一時借用したが、それも“満杯”になって困っている。広い小学校舎は廃校になるので一部を利用させてくれ」とのことであった［金子 1990: 558］。当初、3 教室だけという条件つきの使用内容だったにもかかわらず、1 週間もたたないある日に金子が校舎を訪れると、6 教室に「ギッシリと持ち込まれた民具の山」に驚かされたという。「約束が違うと言いたいが、案内してくれた人々が意欲的であることと、真剣なのに心を打たれ、既成事実の前に遂に黙認」し、結局この老人クラブに廃校舎を博物館として使用することを認めるに至った［金子 1990: 558-559］。

林の片腕として民具収集に当初から関わった中堀均は、「はじめは、選定しながら物を収集していたが、途中から――くれるものは、なんでももらいます」となり、当初のもくろみ通りの完全な自主的供出は困難であったため、自ら足を運んで収集したと述べている。この頃佐渡では民家の立て替えが急速に進んでいたため、取り壊された家から不要な道具を集めることにし、大工

から情報を得てトラックで乗りつけて収集した。ある程度集まって一部を展示すると、周辺住民がやってきては自分の家にもあると言って自主的に提供してくれるようになったという。準備委員会立ち上げの頃には隣の琴浦集落で研究活動をしていた武蔵野美術大学の建築やデザインを専攻している学生グループ（後にTEM研究所として法人化）も協力するようになった［中堀1983: 59-60］。1970年5月に町教育委員会は博物館設立準備委員会を設け、10名の委員を任命し、作業は本格化するに至った［中堀1983: 59］。

ではこの博物館の設立は誰が推し進めたと言えるのだろうか。現在この博物館は住民参加によって成し遂げられた成功例として言及されることもあるが、経緯を追っていくと住民の主体性なるものによって作り出された美談として片付けることが難しいことも分かる。金子繁によると、老人クラブが民具収集に奮起した理由として、「国仲や羽茂に比較して約十年位開発の遅れた岬の村々にも、戦中戦後の苦難な時期に放置された住宅や作業場の新築機運が漸く高ま」る中で、「愛着をもっていた昔からの使い道具が焼かれたり、海へ捨てられて、一掃されること必至となったことが直接刺激になったらしい」ことがあるというが［金子1990: 559］、前述のように老人クラブを前面に立てたのは林道明である。その林も行政＝中堀の協力や、宮本の影響を多分に受けて一連の行為を遂行していたと思われる。

金子は続けて、「この頃宿根木部落へしばしば立ち寄っていた武蔵野美術大学教授・民俗学者宮本常一先生の影響が、直接あった」ことを挙げているが［金子1990: 559］、確かに当時、宮本は本土において郷土博物館の設立や民具学の体系化の先鋒に立っており、林らは彼の動きに影響を受けるか、あるいは彼に直接意見を求めていたと思われる。諸説あるものの、宿根木における博物館建設構想を提案したのは宮本であるとする記録もある［『日本経済新聞』2001年4月17日］。宮本は「民具試論」の中で、1968年に種子島西之表市を訪れた際に民具展を見学し、内容以上に老人クラブが集めたという方法に注目していた。「近頃、各地に老人クラブが結成せられているけれども、それは老人の交歓会程度に終っている。しかし、老人クラブの事業として民具調査や募集をおこなうならば、大きな成果をあげるであろう…」と述べている［宮本2005（1969）: 107］。

こうした構図から見て取れることは、博物館設立の過程では住民・地域の有力者・行政・外部からの研究者や学生の相互交渉があったということであり、宮本はあくまでそうした動向の一部、あるいは強調するとしても種々の動きの結節点として位置づけておく必要がある。

（2）「場」の形成

1966年以降しばらく佐渡から遠ざかっていた宮本が4年の空白を経て再び佐渡へ通いはじめたきっかけは、相川町の町史編纂の監修を請われたことによる。1970年5月2日～6日（4泊5日）の間に、ひとまず南佐渡を一巡し、その際宿根木に立ち寄って、集められた民具を見て「海に関するものを中心に集めてはどうか」と指導した［中堀1983: 60］。その後、相川へ行き、町史編集委員の郷土史家たちと寺町を歩いた。後に出版される『佐渡相川の歴史資料集2　墓と石造物』には宮本が監修の言を寄せている［相川町史編纂委員会1973］。

同年8月に宮本はかねてより交流のあった田耕から「おんでこ座夏期（季）学校」に校長として招かれ、全日程の前半3日間を参加者の若者たちと共に過ごした。おんでこ座は人形芝居で各地を転々としていた田耕が島の芸能を継承し、若者たちにその「良さ」を再確認させるために設立したものだった［『新潟日報』1970年9月11日］。いわば芸能を主軸とした新たな島興し運動

であった。この活動を地元から支えたのが、先の九学会調査で宮本に協力した本間雅彦である［本間 1994: 11-13］。しかしながら島内では十分な座員を集められず、夏に学校を開いて座員の候補者を見つけようとした。小田実や横尾忠則などの著名人を講師陣に入れ（ただし 2 人は来なかった）、永六輔のラジオ番組や雑誌『an an』などで宣伝したこともあり、首都圏や関西方面から 31 名の参加者が集った［鼓童文化財団 2011: 37-44］。彼らは一週間、佐渡の芸能に触れただけでなく、地元の若者たちと交流して討論会を行った［『新潟日報』1970 年 9 月 1 日］。すでに宮本は民俗芸能を通して、島の人々の自信を回復させる田の狙いに賛同し、おんでこ座旗揚げのための資金活動に協力していた。

田は壮大な実施計画を立てており、それは夏期学校の最終日に参加者に伝えられた。計画とは日本の大太鼓を担いでヨーロッパや北南米を公演し、日本各地の幼稚園行脚に出かけるとともに、将来的には職人を育成する「日本海大学」を設立するというものであった［『新潟日報』1970 年 9 月 11 日］。こうして、1971 年 4 月より、10 名の座員を集めて、本間の妻の実家であった畑野町の旧医院で稽古を開始した。

1971 年は芽生えつつあった様々な運動体が実体化し、実質的に稼働しはじめた年だった。この年 8 月 1 日～ 4 日の間に佐渡を訪れた宮本の行程を見るとそのことがうかがえる。初日は田耕に迎えられておんでこ座のある畑野へ行き、琴浦で調査をしていた武蔵野美術大学の学生たち、宿根木の林道明も合流した交歓会に参加した。翌 2 日は地元青年を相手に 1 時間ほど講演し、小木町役場で助役に挨拶をし、琴浦に行って武蔵美の学生の仕事を見てコメントした後は、旧宿根木小学校に集められた民具を見た。日記には「よくあつめている。大工道具面白し」とある。翌 3 日は琴浦の民家を 3 軒ほど見物し、午後に宿根木の林の寺で休み、再度夕方に琴浦に帰って、地元の青年たち、武蔵美の学生たち、おんでこ座の若者たちとともに、深夜 2 時まで話にふけった［毎日新聞社編 2005b: 268］。同年 11 月 28 日にもおんでこ座を訪れ、林とは博物館について話し合っている［毎日新聞社編 2005b: 270］。

おんでこ座があった畑野は南佐渡から幾分距離が離れてはいたのだが、座長である田が宮本を頼ったためか、南佐渡に集う若者たちとおんでこ座の座員との間には自然と交流が生まれたと言われている。南佐渡もおんでこ座も宮本が来島時には必ず立ち寄る場所であり、座員の回想にも「どうじゃ君達、元気にやっておるかハハハハ…」と若い座員たちを激励する姿が記されている［河内 2004（1981）: 453］。また、宮本は一時疎遠であった本間雅彦とおんでこ座を通して旧交を温めた。本間は民具集めや博物館開館までの動きに直接加わってはいなかったが、これを契機に佐渡の民具を紹介する「民具のはなし」を『新潟日報』佐渡版に 1972 年を通して連載した。

他方民具の集められた旧宿根木小の廃校舎は、2 年の準備期間を経た 1972 年 6 月 14 日に「佐渡国小木民俗博物館」として開館した。館長には宮本旧知の林道明が就いている。目立たない記事ではあるが『新潟日報』は「…町が二年がかりで収集した民具約五千点が展示されており、島内では珍しい大規模なもの。すでに大工道具、日用品、農機具類、神事、仏事、陶器などに分類が終わり、連日見物者が訪れている」と報じている［『新潟日報』1972 年 6 月 18 日］。記念祝賀会には宮本も訪れ、記念講演を行った［金子 1990: 560］。1973 年 3 月までには更に船大工道具・和船資料 1034 点、1974 年 3 月に南佐渡の漁撈用具 1293 点を集め、以上は同年 11 月に国の重要有形民俗資料に指定された。その関係で地元の若者や宮本を執筆陣に含む『南佐渡の漁撈習俗』という漁撈を中心とした、この地域に関する民俗誌が急遽発刊され［新潟県佐渡郡小木町編 1975］、1976 年 3 月には指定された民俗資料のための収蔵庫が完成し、次いで 1984 年には宮本

が生前指導した新館も開館している［金子 1990: 561-567］。

民俗博物館創設の動きが見られた 1970 年代はじめの南佐渡、特に小木町は観光文化研究所、武蔵野美術大学の学生たちやその卒業生らによる TEM 研究所の研究員たちに加え、おんでこ座夏期学校のように首都圏からの若者が多数出入りする場所になっていた。当時学生運動が終息に向いつつあるなかで、佐渡のような離島の、中でも「発展」から取り残された場所に若者の居場所が見いだされたことは注目に値する。こうした都市部からの若者と地元の若者とが相交わる場が博物館やおんでこ座、さらに宮本を介して醸成されたのである。

（3）日本海大学構想とその後の南佐渡

以上記述してきたような 1970 年代初頭の様々な活動の集大成とも言えるのが、1974 年 9 月 7 日～ 10 日の間に宿根木公会堂で開かれた「第 1 回日本海大学講座」だった。「佐渡に手づくりの大学を作る会」が主催したこの講座のテーマは「佐渡を考える」で、島内だけでなく東京や新潟から集まったおよそ 110 名の参加者があった。連日深夜まで島の観光、農業、仲間作り、生きがいなどについて討論が行われた。講師の一人として参加した宮本は「地域に住む者の姿勢として、中央―都会に直結することばかり考え、都会の文化を借り、それに遅れまいと不安がるのではなく、佐渡独自な文化を打ち立てよう―その作業に参画することを大学の底流にしよう」と語った［『新潟日報』1974 年 9 月 12 日］。

この日本海大学講座を構想し実際に実働部隊として活動したのは、同年宿根木集落の空き家を借りて地元の若者たちが作った「若衆宿」のメンバーであった。若衆宿は一連の街づくり活動を通じて知遇を得た佐渡の若者たちが、互いの居住集落を超えて日常的に集まり討論できる場を求めて形成した「宿」であるとして、当時佐渡では話題を呼んだようである［『新潟日報』1974 年 9 月 12 日］。コアメンバーには博物館所蔵の民俗資料（漁具）の整理のため、小木町職員となった元漁師の高藤一郎平などがいたが、博物館設立運動を通じて形成された人材やネットワークが、こうして次なる活動を生み出す土台になっていたのである。

第 1 回講座の 2 年後である 1976 年 7 月 17 日～ 19 日には、小木町を拠点に日本生活学会の研究大会が第 2 回日本海大学講座と共同で実施された。同年『南佐渡の漁撈習俗』が日本生活学会の第 1 回今和郎賞を受賞したこともあり、書籍の舞台である南佐渡を日本海大学講座の協力のもとに見学するという名目も伴っていた。参加者 51 名は博物館見学や学習会、それを踏まえた討論会などを行ったとされているが［『新潟日報』1976 年 7 月 29 日］、地元の一般住民を巻き込みながら実施されている点からは、単なる学術的な学会としてではなくこの会合が街づくりの延長上で行われていたことを伺わせる。

宮本の最後の佐渡訪問は 1980 年 5 月 12 日から 15 日の間のことである。この時、「小木町生活振興研究計画」のために小木半島を調査して回り、海外公演の成功を経て日本各地でコンサートを行い、名称を漢字表記に改めていた「鬼太鼓座」の公演を鑑賞したという［林 1982: 113］。生活学会以降、1979 年 9 月 22 日に第 4 回日本民具学会の大会が小木町公民館講堂にて開催されたり、宮本も翌日小木町公民館で開催された第 6 回民具研究講座で話をしたりしているが［須藤編 2004: 166］、住民主導で立ち上げようとしていた日本海大学は構想のまま頓挫し、日本海大学講座も第 2 回以降は開催されていない。小木民俗博物館は公立施設として現在まで存続し、鬼太鼓座も 1980 年に田耕との決別を経て「鼓童」と改称しながら、プロの音楽集団として現在まで至っているが、こうした制度的・財政的基盤を持った機関以外の活動は、若衆宿を含めて一時的な熱

気の中で隆盛し、そして熱が冷めるように収束していったことも否めない。

その要因として、構想を具体化させ困難に突破口を見出すような実行力の欠如を指摘したり、あるいは宮本の死をきっかけに支柱を喪失したことに求めたりすることも不可能ではない。他方で以降の南佐渡で見られるいくつかの住民参加型地域開発や街づくりの事例の中には、1970年代の諸活動を契機に培われた人脈や、そこでの知見の継承を発見できるものも少なくなく、一つ一つの現象を丹念に精査していくことで相互の連鎖を見出すことが可能である。ただそれは今後の課題であり、本論において重要なのはあくまで宮本民俗学における「実践」の拡がりであり、かつそれが街づくりという生活の場に展開する政治的プロセスと連動した意味合いをもっていたことを、具体的な史的事実から示すことであった。

4．結論

前章までの記述から析出される宮本の民俗学的実践の視座とは何か。とりわけ彼の学問が民俗研究と社会的実践との分別しがたい混淆性を見せ始めて以降の、地域社会をベースとした活動の視座を一言でまとめると「運動としての開発」であった。ここでいう運動とは社会運動や住民運動などとして使われる際と同様に、現状の変革のための組織的・集団的行動であり［道場・成 2004: 4］、佐渡という地域性や文化をめぐる運動という意味では文化運動と称しても良い。要するに、南佐渡における地域開発は宮本を一種の結節点にしながらも、彼を含む複数の主体によって進められてきた一種の文化運動だったというのが我々の捉え方である。民俗学という学問の拡がりを「野」において捉える際に運動概念が有効であることは、既に小国喜弘が示した通りであるが［小国 2001］、更に本論に関わる3つの示唆を引き出したい。

第一は、運動概念に含まれる集団性あるいは組織性という意味合いに関してである。南佐渡で行われた種々の街づくりは必ずしも体系的な組織があるわけではないにせよ、特定個人もしくは機関に活動の原動力が収斂するものではなく、宮本や複数の有志、行政の担当者、農民や島内外の若者らがネットワーク状につながることで現実化してきた。またこのネットワークに単に人だけでなく、廃校や若衆宿、宿根木集落といった非人間的要素（アクターネットワーク理論の言葉を借りればモノ）を入れ込むこともできる。これらの人とモノとの相互交渉によって進められた現象として地域開発を捉えることは、宮本の時代の開発分析に限られた視点ではなく、開発主体が住民・行政・外部移住者等に多極分散化する現在のローカルガバナンス、あるいは住民参加型開発を捉える上でも有効である。

第二は、この概念が宮本像を相対化することにつながる点である。しばしば宮本の社会的実践は、彼個人の資質やカリスマ性に還元されて語られてきた［佐野 2009］。だが運動体として開発を捉えることは、そうした語りを踏襲することでしばしば見えなくなっていた、フィールドにおける宮本民俗学の相対的位置づけを析出するというメリットがある。宮本個人への還元的視点を離れた広い文脈から見ると、彼は運動を先頭で率いる実務者というよりも、面的に拡がる運動の一部を構成する一個人であり、その立場は講演等を通じて住民や行政を啓発し（「その気にさせ」）、運動の主体へと変換していく役割にあったことが明らかとなった。

第三は宮本民俗学における政治へのコミットメントについてである。佐渡における宮本の実践への傾斜過程は、第一次産業振興に渇望する生産者や行政、再帰的な文化表象を試みる郷土研究

者や若者、外部からの移住者等から発せられる様々な要請にその都度応えようとした、きわめてアドホックな態度を示している。もちろん宮本に内在する貧困へのまなざしが彼自身を突き動かしたこともあるにせよ、九学会連合調査という「純粋」な学術調査から社会的実践へという一連の流れが映し出すのは、眼前に拡がる「民衆の持つエネルギー」［宮本 1993（1973）: 218］への過剰なまでの応答である。藤田省三の批判同様にこうした宮本の態度が「無作為の政治性」につながった点は否めない。例えば宮本は佐渡で、中央に従属せず地方の住民の自己決定によって地域開発や観光を行うことを繰り返し主張しているのだが、離島社会の自立のために奔走した種々の法整備が、彼の意図とは裏腹に補助金依存の産業構造・文化行政をもたらし、岩本の言うように結果として「中央依存の体質を離島に作り上げた、その典型」に帰結した［岩本 2012: 44-45］。

筆者らは 1970 年代南佐渡で行われた文化運動としての地域開発を、宮本個人の成果としてのみ描くのではなく、その相対化を計る意図をもって歴史的記述を行ったが、だからといって宮本の行った役割をことさら低く見積もる意図はなく、現在への遺産的継承については今後更に検討していく必要があると考えている。しかし眼前に拡がる課題へのアドホックな済民志向がもたらす「無作為の政治性」は、何も宮本だけの話ではない。多かれ少なかれフィールドへのコミットメントを求められ、また多くの研究者がその要請に応答しつつある現在、全ての民俗学者に課されるシビアな問いである。

付記

本稿は現代民俗学会第 12 回研究会（2011 年 12 月 11 日）における発表に、更なる考察を加えたものである。内容は筆者 2 名の合議に基づくが、執筆作業は門田がはじめに・1 章・2 章 1 節・4 章を、杉本が 2 章 2 節・3 章を主として担当した。なおデータの一部は柳平則子氏（元相川郷土博物館）、池田哲夫氏（新潟大学）、高藤一郎平氏（元佐渡市）、周防大島文化交流センターからの提供による。調査・研究はトヨタ財団による研究助成の一環として遂行された。以上謝して記したい。

文献

相川町史編纂委員会　1973『佐渡相川の歴史資料集 2　墓と石造物』相川町
赤泊村　1964『経済実態調査報告』赤泊村
赤泊村史編纂委員会　1989『赤泊村史　下巻』赤泊村教育委員会
池田哲夫　2010「佐渡と宮本常一―地方の民俗研究者との交流」『佐渡・越後文化交流史研究』10
岩本通弥　2012「民俗学と実践性をめぐる諸問題―「野の学問」とアカデミズム」岩本通弥・菅　豊・中村　淳編『民俗学の可能性を拓く―「野の学問」とアカデミズム』青弓社
岩本通弥編　2013『世界遺産時代の民俗学―グローバル・スタンダードの受容をめぐる日韓比較』風響社
大塚英志　2007『公民の民俗学』作品社
新潟県佐渡郡小木町編　1975『南佐渡の漁撈習俗―南佐渡漁撈習俗緊急調査報告書』小木町
おけさ柿物語編集員会編　1985『おけさ柿物語　羽茂町誌 1』羽茂町
鼓童　1989『鼓童』64
鼓童文化財団　2011『いのちもやして、たたけよ。―鼓童 30 年の軌跡』出版文化社

金子　繁　1990『小木町政の思い出　上巻』自費出版
河内敏夫　2004（1981）「宮本先生との出会い」宮本常一先生追悼文集編集委員会編『宮本常一―同時代の証言』（復刻版）マツノ書店
川森博司　2012「当事者の声と民俗誌―日本民俗学のもうひとつの可能性」『東洋文化』93
菊地　暁　2001『柳田国男と民俗学の近代―奥能登のアエノコトの二十世紀』吉川弘文館
小国喜弘　2001『民俗学運動と学校教育―民俗の発見とその国民化』東京大学出版会
坂野　徹　2012『フィールドワークの戦後史―宮本常一と九学会連合』吉川弘文館
さなだゆきたか　2002『宮本常一の伝説』阿吽社
佐野眞一編　2005『宮本常一―旅する民俗学者』河出書房新社
佐野眞一　2009『旅する巨人―宮本常一と渋沢敬三』文藝春秋
重信幸彦　2010「動員と実践のはざまから―バード・ホンブルグの問い」『日本民俗学』263
信田　敬　2004（1981）「佐渡南部農業開発と宮本先生」宮本常一先生追悼文集編集委員会編『宮本常一―同時代の証言』（復刻版）マツノ書店
菅　豊　2012「公共民俗学の可能性」岩本通弥・菅　豊・中村　淳編『民俗学の可能性を拓く―「野の学問」とアカデミズム』青弓社
須藤　功編　2004『写真でつづる宮本常一』未来社
武川正吾　2010「地域福祉の主流化とローカル・ガバナンス」野口定久・平野隆之編『日本の社会福祉 6　地域福祉』日本図書センター
谷川　雁　1971「近代主義への一矢」『谷川健一評論集』冬樹社
鶴見太郎　1998『柳田国男とその弟子たち―民俗学を学ぶマルクス主義者』人文書院
永田　祐　2011『ローカル・ガバナンスと参加―イギリスにおける市民主体の地域再生』中央法規
中堀　均　1983「佐渡国小木民俗博物館―民具の収集」『博物館研究』184
林　道明　2004（1981）「佐渡の宮本先生」宮本常一先生追悼文集編集委員会編『宮本常一―同時代の証言』（復刻版）マツノ書店
林　道明　1982「宮本先生と佐渡」『しま』106
藤田省三　1960「昭和 15 年を中心とする転向の状況」思想の科学研究会編『共同研究　転向』平凡社
本間雅彦　1994「鬼太鼓座事はじめ」『たいころじい』10
本間雅彦 2004（1981）「出会いと別れ」宮本常一先生追悼文集編集委員会編『宮本常一―同時代の証言』マツノ書店
毎日新聞社編　2005a『宮本常一写真・日記集成　上』毎日新聞社
毎日新聞社編　2005b『宮本常一写真・日記集成　下』毎日新聞社
宮本常一　1961「佐渡の原始生産構造」『人類科学』13
宮本常一　1962「佐渡北岸における農業生産の発展と労力」『人類科学』14
宮本常一　1964a「労働慣行」『佐渡　自然・文化・社会』平凡社
宮本常一　1964b「渋沢先生と九学会連合の調査」『佐渡　自然・文化・社会』平凡社
宮本常一　1969a（1959）「佐渡をまわる」『宮本常一著作集 4　日本の離島 1』未来社
宮本常一　1969b（1960）「佐渡小木岬」『宮本常一著作集 4　日本の離島 1』未来社
宮本常一　1970（1962）「佐渡所感」『宮本常一著作集 5　日本の離島 2』未来社
宮本常一　1993（1973）『民俗学の旅』講談社
宮本常一　2005（1969）「民具試論」『宮本常一著作集 45　民具学試論』未来社
宮本常一　2009（1970）『私の日本地図 7　佐渡』平凡社
室井康成　2010a「「ガバナンス」の現在と民俗学研究の方向」『日本民俗学』262

室井康成　2010b『柳田国男の民俗学構想』森話社
山古志村写真集制作委員会編　2007『ふるさと山古志に生きる―村の財産を生かす宮本常一の提案』農山漁村文化協会
山本　啓編　2008『ローカル・ガバメントとローカル・ガバナンス』法政大学出版局

【資料 1】 宮本常一の略年譜と佐渡
（佐野編［2005］の年譜および［毎日新聞社編 2005a; 2005b］を参考に加筆・修正。ゴシックは佐渡関連）

1907（明治 40）年：8 月 1 日、山口県周防大島に生まれる
1922（大正 11）年 15 歳：郷里の小学校高等科を卒業。祖父、両親について農業。翌年 4 月、大阪逓信講習所に入所
1924（大正 13）年 17 歳：4 月、大阪高麗橋郵便局に勤務
1926（大正 15）年 19 歳：大阪府天王寺師範学校第二部に入学。文学書を乱読
1927（昭和 2）年 20 歳：4 月、大阪第八連隊へ短期現役兵として入営、8 月末退営。9 月、祖父・市五郎、死去。大阪府泉南郡有真香村修斉尋常小学校に就職（訓導）。翌年、4 月、天王寺師範学校専攻科（地理学）に入学
1929（昭和 4）年 22 歳：4 月、泉南郡田尻小学校に赴任（訓導）
1930（昭和 5）年 23 歳：1 月、肋膜炎から肺結核を患い、帰郷し療養。『旅と伝説』に「周防大島」の発表開始
1932（昭和 7）年 25 歳：3 月、健康回復。大阪府泉北郡北池田小学校に代用教員として就職。8 月、父・善十郎、死去
1933（昭和 8）年 26 歳：小谷方明らと和泉郷土研究会談話会をはじめる。ガリ版雑誌『口承文学』を編集刊行。短歌を詠む。雑誌『郷土研究』『上方』に採集報告などを執筆
1934（昭和 9）年 27 歳：3 月、泉北郡養徳小学校に転任（訓導）。9 月、京都大学の講義に来た柳田國男と会う。沢田四郎作らと大阪民俗談話会（のちの近畿民俗学会）を結成
1935（昭和 10）年 28 歳：2 月、泉北郡取石小学校に転任。3 月、大阪民俗談話会に出席した渋沢敬三に会う。8 月、柳田國男の還暦記念民俗学講習会が開催され、全国組織「民間伝承の会」の設立と、機関誌『民間伝承』が発行。渋沢敬三に、郷里の漁村生活誌をまとめるようにすすめられる。12 月、玉田アサ子と結婚
1937（昭和 12）年 30 歳：7 月、『周防大島を中心としたる海の生活誌』を刊行。12 月、長男・千晴誕生。『河内国滝畑左近熊太翁旧事談』を刊行
1939（昭和 14）年 32 歳：10 月、上京し、アチックミューゼアム（1942 年、日本常民文化研究所と改称）にはいり、民俗調査に全国を歩きはじめる。渋沢の強い影響を受ける。11 月、中国地方の旅に出る
1942（昭和 17）年 35 歳：2 月、胃潰瘍で倒れ、療養。7 月からまた歩きはじめる。『出雲八束郡片句浦民俗聞書』『民間暦』『吉野西奥民俗採訪録』などを刊行
1943（昭和 18）年 36 歳：3 月、長女・恵子誕生。この年、保谷の民族学博物館所蔵の民具整理を宮本馨太郎、吉田三郎と共に行う。『屋久島民俗誌』『家郷の訓』『村里を行く』などを刊行
1944（昭和 19）年 37 歳：1 月、大阪に帰り、奈良県郡山中学校の教授嘱託となる。奈良県下を精力的に歩く
1945（昭和 20）年 38 歳：4 月、大阪府の嘱託となり、生鮮野菜需給対策を立てるため、府下の村々をまわる。7 月、空襲によって、調査資料一切を焼く。10 月、戦災による帰農者をつれ北海道北見へ行く。12 月、退職
1946（昭和 21）年 39 歳：1 月、郷里に引きあげる。2 月、大阪府下の村々を農業指導にまわり、あわせて、技術、習俗、社会組織などを調べる。4 月、新自治協会の嘱託（農村研究室長）となり、食料増産対策のために全国を歩く。二男・三千夫誕生（夭折）
1947（昭和 22）年 40 歳：農業の手すきの折を利用して農業指導に各地を歩く。10 月、公職追放で暇になった渋沢と関西、瀬戸内、九州各地を歩き、地域リーダーたちに逢う
1948（昭和 23）年 41 歳：10 月、大阪府農地部の嘱託となり、農地解放と農協育成の指導にあたる。「大阪府農業技術経営小史」「篤農家の経営」を書く。『愛情は子供と共に』『村の社会科』などを刊行
1949（昭和 24）年 42 歳：6 月、リンパ腺化膿のため危篤、命を取り留める。10 月、農林省水産資料保存委員会調査員として、瀬戸内海漁村の調査。この年、日本民俗学会評議員になる
1950（昭和 25）年 43 歳：八学会（翌年から九学会）連合の対馬調査に民族学班として参加。帰途、壱岐調査
1952（昭和 27）年 45 歳：5 月、長崎県五島列島学術調査に参加。12 月、三男・光誕生。翌年、5 月、肺結核が再発し赤坂前田病院に入院。10 月、全国離島振興協議会設立、事務局長となる。『日本の村』を刊行
1954（昭和 29）年 47 歳：12 月、林業金触調査会を設立。理事として指導と山村の社会経済調査。翌年、『海を開いた人々』『民俗学への道』などを刊行
1957（昭和 32）年 50 歳：5 月、『風土記日本』（全七巻）の編集執筆（～ 1958 年 12 月）
1958（昭和 33）年 51 歳：3 月 27 日、「午后、田尻耕三来てはなしていく。この男すこしおちつきがないようである。じっくりした仕事をさせたいものである。夜までいてかえる…」。10 月、人類学会・民族学会の連合大会（新潟大学）に参加後、**佐渡をまわる（1 泊 2 日）。本間雅彦の出迎え（新潟→両津→相川→尖閣湾　八幡ホテル泊）**。10 月、木下順二らと雑誌『民話』を創刊。「年寄りたち」を連載、後に『忘れられた日本人』にまとまる。『中国風土記』を刊行
1959（昭和 34）年 52 歳：**8 月、九学会連合佐渡調査に民族学会から参加（12 泊 13 日）**。9 月、「瀬戸内海の研究―島嶼の開発とその社会形成」によって、東洋大学より文学博士の学位。『日本残酷物語』の編集・執筆
1960（昭和 35）年 53 歳：**8 月、九学会連合佐渡調査（14 泊 15 日）**。『忘れられた日本人』『日本の離島』（第 1 集）などを刊行

1961（昭和36）	年54歳：『日本の離島』によりエッセイストクラブ賞受賞。中国文化賞受賞。『庶民の発見』『都市の祭と民俗』などを刊行
1962（昭和37）	年55歳：3月、母・マチ死去。8月、柳田國男逝去。**11月30日～12月5日、宿根木・称光寺住職の林道明により南部地区公民館主催の社会教育研究会講師として招聘（5泊6日）。羽茂町のおけさ柿の普及指導者・杉田清を知る。宮本は南佐渡の町村に農業指導、開発計画の企画等で頻繁に招かれる。**『甘藷の歴史』を刊行
1963（昭和38）	年56歳：10月、渋沢敬三逝去。**12月、南佐渡および真野町を訪問（6泊7日）。**この年、若い友人たちとデクノボウ・クラブをつくり、雑誌『デクノボウ』刊行。「日本発見の会」をつくり、雑誌『日本発見』刊行。『民衆の知恵を訪ねて』『村の若者たち』『開拓の歴史』『日本民衆史』などを刊行
1964（昭和39）	年57歳：**3月、羽茂町など（3泊4日）。**4月、武蔵野美術大学非常勤教授に。**6月、南佐渡および真野町を訪問（10泊11日）。8月、南佐渡を訪問（4泊5日）。**『離島の旅』『日本の民具』（全4巻）などを刊行
1965（昭和40）	年58歳：**3月、南佐渡を訪問（4泊5日）。羽茂町の総合開発審議会委員に就任。**4月、武蔵野美術大学専任教授（民俗学、生活史、文化人類学担当）に。この頃から民具の調査研究に本格化。**8月、南佐渡を訪問（3泊4日）。**『絵巻物による日本常民生活絵引』（共著）、『瀬戸内海の研究1』などを刊行
1966（昭和41）	年59歳：1月、日本観光文化研究所開設、所長として、姫田忠義、長男・千晴らと研究に従事。**3月、羽茂町を中心に佐渡（3泊4日）。**4月、武蔵野美術大学に生活文化研究会をつくる。**9月、南佐渡をまわる（3泊4日）。**『日本の離島』（第2集）を刊行
1967（昭和42）	年60歳：3月『宮本常一著作集』（未來社）の刊行始まる。4月、早稲田大学理工学部講師となり、民俗学を講ずる。7月、結核再発し、北里病院に入院。**日本観光文化研究所の若手を南佐渡へ送る**
1969（昭和44）	年62歳：**武蔵野美術大学の学生たちが小木町白木調査（おんでこ座設立の資金集めに協力）**
1970（昭和45）	年63歳：**5月、相川町史編纂指導のため佐渡。南佐渡もまわる（4泊5日）。8月、佐渡で開催された「おんでこ座夏期学校」に校長として参加。1966年までの訪問をもとに『私の日本地図7　佐渡』（同友館）を刊行。この年より小木町宿根木の林道明を中心に民具を蒐集**
1971（昭和46）	年64歳：**4月、おんでこ座、畑野町の宿舎で稽古開始。8月、おんでこ座訪問。宿根木小に集まった民具を見る。武蔵野美術大学の学生とともに小木町琴浦（同町宿根木の隣の集落）で調査。おんでこ座、武蔵美の学生、琴浦の若者を集めて話し合い。11月、金井町の要請で佐渡。宿におんでこ座の田耕来る。博物館設立については宿根木の林道明と話し合い（3泊4日）**
1972（昭和47）	年65歳：**3月、相川町と南佐渡をまわる。この頃問題になっていた飛行場の候補地（相川町二見と小木町金田新田）を視察。宿根木で博物館の準備状況を見る。武蔵野美術大学の学生を中心に69年に設立されたTEM研究所の小木町琴浦調査を見る。林道明と一緒におんでこ座訪問（3泊4日）。6月、佐渡國小木民俗博物館の開館（13日）。宮本も式典に参加・挨拶（2泊3日）。（6月末、おんでこ座、稽古場を真野町の大小小学校へ移す）。**9月、日本生活学会設立、理事就任
1973（昭和48）	年66歳：**7月、南佐渡、相川町をまわる。おんでこ座でも宿泊（7泊8日）。（おんでこ座に宛てた宮本の手紙は鼓童の食堂にあり）**
1974（昭和49）	年67歳：**9月、小木民俗博物館が企画した、第1回日本海大学（講座）に参加・講演（4泊5日）**
1975（昭和50）	年68歳：**2月、この年の5月に刊行される『南佐渡の漁撈習俗』の編纂のため佐渡へ（2泊3日）。5月、羽茂町を回る（2泊3日）。**7月、日本観光文化研究所アムカス探険学校に参加。アフリカのケニア、タンザニアで民族文化調査を行う。11月、日本民具学会設立、幹事となる
1976（昭和51）	年69歳：3月、**羽茂町で講演。宿根木、鬼太鼓座をまわる（1泊2日）。7月、生活学会による南佐渡の見物会のために南佐渡へ。日本海大学講座の協力（3泊4日）**
1977（昭和52）	年70歳：**3月、両津市（視察、講演）、相川町、鬼太鼓座、小木町をまわる（4泊5日）。**大学を退職。三男・光が郷里で農業に従事、しばしば帰郷。村崎義正らに猿まわしの復活をすすめ応援する。10月、済州島に渡り、海女の調査。12月『宮本常一著作集』（第一期25巻）完成によって、日本生活学会より今和次郎賞を受賞
1978（昭和53）	年71歳：9月、今西錦司、四手井綱英、河合雅雄、姫田忠義らと猿の教育研究グループを結成。『民俗学の旅』を刊行
1979（昭和54）	年72歳：**3月、相川町で「激変する佐渡の観光」と題した講演。羽茂町でも講演会。（2泊3日）。9月、第4回日本民具学会大会（小木町にて）に参加（3泊4日）。**土佐へ長州大工の調査。7月、日本観光文化研究所において「日本文化形成史」講義
1980（昭和55）	年73歳：3月、郷里山口県大島郡東和町に郷土大学をつくり、学長に。**5月、最後の佐渡（3泊4日）。「小木町生活振興研究計画」のため。宿根木称光寺に宿泊。小木半島（沢崎－白木－江積－小比叡の各集落）をめぐる。小木町役場で講演会。少ない予算でありながら文化面に多くを支出していることを喜ぶ。鬼太鼓座の公演を公民館ホールで聞く。博物館について指導。新館建設はいいが旧校舎部分を残すことを提言。**7月、志摩民俗資料館設立に寄与。9月、中国へ。「海から見た日本」（日本民族とその文化の形成史）の構想がかたまり、執筆準備。12月、都立府中病院に入院
1981（昭和56）	年73歳：1月、再度入院。1月30日、胃癌のため死去（**鬼太鼓座のメンバーが葬儀を手伝う**）